



名桜大学訪問、およびくいなエコ・スポレク公園視察

日 時： 2015 年 2 月 18 日 (水) 9 時～16 時

訪問先： 名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科

遠矢 英憲 上級准教授 (名桜大学総合研究所副所長)、田原 亮二 上級准教授、
小賦 肇 上級准教授、前川 美紀子 上級准教授、財務部プール担当 比嘉 義典 氏
くいなエコ・スポレク公園とその周辺

内 容： 名桜大学におけるスポーツを通じた地域貢献―地域特性を生かした社会貢献―
くいなエコ・スポレク公園周辺視察 (スポーツキャンプ地調査)

報告者： 野呂 進 (商学部教授)、富川 理充 (商学部准教授)

1. 名桜大学訪問

名桜大学は、那覇市内より車で 1 時間ほど北に向かった名護市内にあり、観光スポットを過ぎて間もない、周りを緑に囲まれた名護湾を見下ろす高台に位置している。一学年の学生数は、国際学群が約 300 名、人間健康学部のスポーツ健康学科と看護学科が各々約 100 名の計 500 名ほどであり、当学の約 1/10 の規模である。今から 20 年前の 1995 年 4 月に私立大学として開学し、5 年前の 2010 年 4 月より公立大学として沖縄北部の 12 市町村に完全移管された。それに伴い、学生もより全国から集まるようになり、現在では県外出身者が半数以上に及ぶ。

キャンパスは決して広いわけではないが開放的で、春休み中にも関わらず、部活や勉強のために通学している学生をちらほら見かけられた。キャンパス内を視察している間、運動部と思いき学生からは、会う人会う人気持ちのいい挨拶の声もきかれた。それが沖縄の風土のためなのか、名桜大学だからこそのかは分からないが、キャンパス全体としてアットホームな雰囲気を

醸し出しているように思い、親しみを感じられた。当研修では、名桜大学の主に体育施設を視察するとともに、野外教育、その中でも水辺活動を専門とする同大学人間健康学部スポーツ健康学科の上級准教授である遠矢英憲先生を訪問し、スポーツを通じてどのように地域との連携を図る活動を行っているか、学生と地域とをつなぐためにどのような活動を行っているかを調査した。

(1) 教養体育のカリキュラム

教養教育科目の中に、全学共通のコア科目が配置されており、アカデミックスキル、ライフデザイン、思想と倫理、沖縄理解、健康スポーツの各分野に関する科目が開講されている。健康スポーツには体育実技 (I、II) と理論科目 (健康・スポーツ科学) が選択必修科目として置かれており、そのうち合計 2 単位の取得が卒業要件となる。

スポーツ健康学科においては、スポーツ健康演習が 1 年次の必修とされており、人間教育や安全教育を目的に、プロジェクトアドベンチャーやスノーケリング実習を組み込んでいる。これ

らのプログラムは学外の施設や場所を利用し展開しており、大学からバスで移動して授業を実施している。当然、その地域の方々、学生同士、学生と教員の協力なくしては成り立たないものであり、初年次教育としての効果も期待したプログラム展開と位置付けている。ただし、後期開講ということで、何とかプロジェクトアドベンチャーのプログラムだけでも前期開講の科目に組み込めないか、あるいは全学共通の科目として開講できないかと画策しているとのことであった。

当研究所では昨年度、大阪工業大学准教授 (現筑波大学体育系教授) の木内敦詞先生を招聘し、大学教養体育が初年次教育として果たす役割についての特別研究会を催したが、名桜大学でも同様に、木内先生を招聘し研究会を実施したとのことであった。現在では、スポーツの教育とともにスポーツを通じた教育をより重視している大学が増えていることが実感された。

(2) キャンパス・施設―地域拠点として―

開学当初からの体育施設が中心であり、空調や規模に苦勞している。大学の決定プロセス



写真 1. 名桜大学正門



写真 2. 名桜大学総合グラウンド



写真 3. 北部生涯学習推進センター滞在型研修施設

は最終的には12市町村の合議制がしかれ、それらの改善策を講じるのにも時間がかかる半面、公立大学となったことで良い面もあるようである。それは、大学としての機能だけでなく、地域拠点としての役割を担うことにある。

「やんばる」ともいわれる沖縄県北部地域は高齢化や過疎化が進んでいるのみならず、県内の他の地域と比較すると経済的な格差もあるようだ。そのような状況の中で、北部地域の生涯学習や教育研究、健康、まちづくりなど、様々な活動の地域拠点となるべく組織が学内に整備されている。その中心となるのが、キャンパスの北側に配置された名護市の施設である北部生涯学習推進センターである。講義等で用いられる教室のみならず、普段は大学の授業で体育館として、あるいは入学式や卒業式などのイベントスペースとしても利用される実習・演習ホールが隣接されている。目の前には滞在型研修施設も設けられており、北部地域の住民に限らず、他県や他地域からも受け入れており、企業研修、学生の合宿や子どもの宿泊学習などに利用されている。

さらに、北部地域の中心となる名護市内や近辺には、大きな競技会を開催できるような各種スポーツ競技場が少なく50mプールもないという。北部地域の大会を開催するにも、数時間をかけて那覇市などの中部地域などに出掛ける必要があり、帰りが夜遅くなることもしばしばのことである。それらの施設を名桜大学として持つことは北部地域の子どもの活動を支援することにつながり、「将来に抱く夢」と遠矢先生は語られた。

北部生涯学習推進センターの施設内の一角には、上述した北部地域の様々な活動の支援や大学と地域をつなぐ窓口となる名桜大学エクステンションセンターが設置されている。例えば、名護市民を対象とした公開講座や、県および北部12市町村・区・自治会を対象とした出前講座を開講しているが、平成26年度の実績は両者を併せて、128講座（前者：32講座、後者：96講座）にも達する。それだけ大学が地域とのつながりを重視し、積極的に地域拠点

の役割を担おうとしているという表れである。

(3) 沖縄における海洋教育の必要性

名桜大学には水深1.2～1.4mで25m×6レーンの屋内温水プールがあり、その隣には水深5mのダイビング訓練用潜水プールが備えられている。水辺活動を専門とする遠矢先生の働きかけにより作られたものと思っただが、プールの完成当時より備わっていたようである。

沖縄は温暖で周りを海で囲まれているので、いつでも海で泳げるためにプールは少なく、それでもほとんどの人が泳げるものと思っただが、しかし現実とは異なり、特に親の世代の人々は、海は危険な場所との認識が強いという。よって、子どもを海で泳がせるよりもむしろ遠ざけ、かといってプールも少ないために実際には泳ぎが苦手な人が多いようだ。とはいうものの、水辺の自然体験から得られる教育効果は大きく、せつかくきれいな海に囲まれた環境の中で生活しているのだからこそ、沖縄における海洋教育は必要不可欠なことである、と遠矢先生は言う。

教養体育のカリキュラムの項でもふれたが、スポーツ健康学科の1年次にはスポーツ健康演習という必修科目があり、スノーケリング実習がプログラムとして組み込まれている。泳ぎを身に付けるのであれば、いわゆる「水泳」の授業でもよい。しかし、それでは水泳嫌い、あるいは泳ぎが苦手な学生が持つネガティブなイメージをかえて助長してしまうおそれがあると考え、スノーケリングを教材として取り入れたそうである。マスク、スノーケル、フィンの三点セットにライフジャケットあるいはウェットスーツを加えた四点セットを正しく着用し、正しいスノーケリングの技術を身につけることが泳力の向上につながる。そこで得られた自信によって徐々に水辺活動への恐怖心が取り除かれる。最終的には海洋実習を通じて海洋教育につなげたり、マリンスポーツを生涯スポーツとして興味を持たせたりすることを意図したこの授業は、成果としてもあがっている（資料1参照）。

希望者には、さらにその他の授業や講習会を受講することによって、スノーケリング協会公

認インストラクター指導者の認定が受けられるようになっている。その認定を受けた先輩学生が、翌年にはインストラクターとして授業補助に入り後輩学生を支援する。また、地域の小学校等へ出張して、あるいは子どもたちを大学へ集め、スノーケリングの授業や教室を行い水辺活動における安全教育を進める。名桜大学の授業における取組みが発端となり、学生とともに地域を巻き込んだ海洋教育のよい循環の仕組みが成立していた。実際に、インストラクターの認定を受けた学生を中心に、地域での水辺活動だけではなく、その他の各種イベントへ積極的に関わるようになってきたということであった。マリンスポーツのメッカである沖縄の特色を生かした大学の地域貢献の一つの形がそこにあった。

蛇足的ではあるが、当学にも水球の試合を開催可能な水深1.8mの25m屋内プールがあり、アクアスポーツという実技科目を開講している。やはり「水泳」の授業にならないよう、泳ぎへの苦手意識を取り払うために、最初からフィンをつけて泳ぐように授業を展開している教員も多い。海洋実習までは実施できないが、フィンにより水中を楽に進む感覚が得られると、泳ぎが苦手な学生も楽しさを覚えるようである。詳細は異なるが、両大学で同じような授業を展開していることの情報共有ができ、今後の共同研究への可能性も話し合うことができた。

(4) 所感

学生数でいうと当学の約1/10の規模で、所在も決していい立地とはいえない一地方大学であるが、あるいはだから故かもしれないが、情報発信や地域との連携を非常に重視していることが伝わった。大学の資源である施設や情報、教職員、学生、ネットワークをいかに地域に還元し、地域の中で大学を成長させていくかということを本当に真剣に考えていた。大学には各々の特徴はあるだろうが、学生を巻き込んだ地域貢献活動の進め方は、ここ川崎においても是非とも参考にしたい。



写真4. ダイビング訓練用潜水プール



写真5. 屋内プール器材庫



写真6. キャンパス内にて(右:遠矢先生、左:野呂所員)



必修専門基礎科目における「マリンスポーツ体験」 -スノーケリング実習の教育効果- "Marine Sports Experiences" in required specialized basic subject - Educational effects in Snorkeling Practice - ○遠矢英憲、東恩納玲代、前川美紀子、田原亮二、石橋千征(名桜大学)



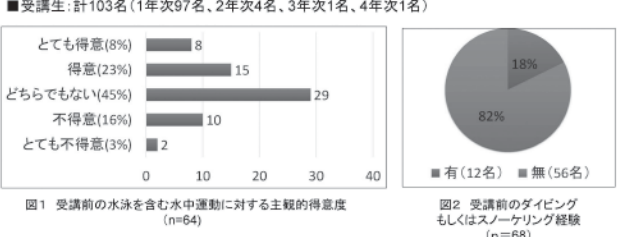
授業内容

<全体概要>
■授業名: 平成25年度 名桜大学人間健康学部スポーツ学科 専門基礎教育科目「スポーツ健康演習」(必修)
■目的:
 ● スポーツの実践を通してスポーツの持つ力を理解し、自らがその価値を享受する態度を身につけ、健康支援人材としての自覚を持つこと。
 ● 健康支援人材に必要な専門技術、専門知識、社会スキルを実践的に身につけていく導入の演習と位置づける。
■到達目標:
 ● スポーツの持つ文化的価値を理解し、享受する態度を身につける
 ● 健康支援人材としての自覚を持つ
 ● 健康支援人材に必要な専門技術、専門知識、社会スキルを身につける
■授業スケジュール(全15回)
 第1回 <10/4(金)>: 全体オリエンテーション(名桜大学ホール)
 第2-4回 <10/6(日)台風延期⇒11/30(土)>:
 プロジェクトアドベンチャー体験(つつじエコパーク<沖縄県東村>)
 第5-9回: マリンスポーツ体験_スノーケリング実習
 ⑤講義1 <10/11(金)>: 沖縄県におけるマリンレジャー事故の実態と予防について
 ⑥講義2 <10/18(金)>: 「スノーケリング概論」
 ⑦実習 <10/19(土)>: 「スノーケリング プール実習」
 ⑧⑨実習 <10/20(日)台風延期⇒11/17(日)>: 「スノーケリング 海洋実習」
 第10-12回 <12/13(金)、20(金)、24(火)>: コース別活動(選択)
 「フィジカルトレーニングコース」
 「生涯スポーツコース」、「指導者養成コース」
 第13-14回 <1/15(水)、16(水)>: 寒稽古(集団行動)
 第15回 <1/31(金)>: まとめ

調査方法

受講生に対して、以下の内容でアンケート調査を行った。
■調査時期
 アンケートは海洋実習終了後に配布し、約2週間後の11/29(金)に提出を求めた。
■調査対象
 本授業受講生103名を対象とした。アンケートの回収数は71名(回収率68.9%)、同意書の回収数は78名(回収率75.7%)であり、アンケートと同意の高方が揃った有効回答数69名(有効回収率67.0%)となった。
■アンケート用紙
 授業内容に関する主観的教育効果および満足度について13項目からなる調査用紙を独自に作成した。全て5段階評価で回答を求めた。
■倫理的配慮
 本研究は、名桜大学人間健康学部倫理委員会の承認(番号25-012-1)を受け、学生にプライバシー及びデータの保護、研究参加の任意性と撤回の自由、利益・不利益、結果の開示、研究成果の公表について説明し、同意書の回収をもって同意を得て実施された。

受講生



マリンスポーツ体験_スノーケリング実習内容

■講義
1.タイトル:「沖縄県におけるマリンレジャー事故の実態と予防について」
 日時: 平成25年10月11日(金)
 外部講師: 第11管区海上保安本部 教鞭課
 場所: 名桜大学講義室
2.タイトル:「スノーケリング概論」
 日時: 平成25年10月18日(金)
 講師: 名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科教員
 場所: 名桜大学講義室
 ※海洋危険生物対処法を含む
■プール実習
 日時: 平成25年10月19日(土)
 場所: 名桜大学屋内プール(25m×6コース)
 班別指導: 沖縄県スノーケリング協会 公認インストラクター
 ※3グループに分けて実施(各グループ2時間)
 ※その他補講: 6回(任意参加)
■海洋実習
 日時: 平成25年11月17日(日)
 場所: 沖縄県大宜味村大宜味海岸
 班別指導: 沖縄県スノーケリング協会 公認インストラクター
 協力: 沖縄県大宜味村
 ※3グループに分けて実施
 (各グループ4時間20分<バス移動を含む>)
 大潮 干潮 00:05 16cm 12:11 72cm
 満潮 06:29 188cm 18:01 200cm
 日出: 6:48 日没 17:38 月齢 13.6
 気温22-25℃ 水温23℃ 風力4 風向 北北東
 ※その他
 使用テキスト:
 スノーケリングハンドブック(日本スノーケリング協会)
認定資格:
 日本スノーケリング協会認定Cカード(ランク: スノーケラー)
成績評価:
 活動状況(50%)、課題レポート(50%)



結果と考察

アンケートの結果を表1に示した。

Ⅰ 水中運動への親しみに関する項目	Mean	S.D.
(ア)水中での運動に自信が持てるようになりましたか。	4.1	0.9
(イ)泳ぐことが好きになりましたか。	4.4	0.8
Ⅱ マリンスポーツに関する項目	Mean	S.D.
(ウ)スノーケリングについて、親しみが持てるようになりましたか。	4.6	0.6
(エ)今後、ステップアップした活動としてスキューバダイビングやスクーバダイビングを行いたいと思いますか。	4.5	0.8
(オ)マリンスポーツに興味を持てるようになりましたか。	4.6	0.7
(カ)マリンスポーツに関する基本的な能力に自信が持てるようになりましたか。	3.9	0.7
①知識に自信が持てるようになりましたか。	3.8	0.8
②技術に自信が持てるようになりましたか。	3.8	0.8
Ⅲ 安全行動に関する項目	Mean	S.D.
(キ)溺水事故の予防や対策について自信が持てるようになりましたか。	4.1	0.6
(ク)海洋危険生物の予防や対策について自信が持てるようになりましたか。	4.0	0.8
(ケ)スノーケリングにおける自己保全能力について自信が持てるようになりましたか。	4.1	0.7
①知識に自信が持てるようになりましたか。	4.1	0.7
②技術に自信が持てるようになりましたか。	4.1	0.7
(コ)スノーケリングにおけるバディ行動や集団行動について自信が持てるようになりましたか。	4.5	0.7
①バディ行動に自信が持てるようになりましたか。	4.5	0.6
②集団行動に自信が持てるようになりましたか。	4.7	0.5
(サ)マリンスポーツにおける安全行動について意識は向上しましたか。	4.7	0.5
Ⅳ 授業内容に関する項目	Mean	S.D.
各テーマにおける授業に満足していますか。	4.6	0.6
(シ)講話「沖縄県におけるマリンレジャー事故の実態と予防について」	4.5	0.6
(ス)講義「スノーケリング概論」	4.6	0.6
(セ)実習「スノーケリング プール実習」	4.6	0.6
(ソ)実習「スノーケリング 海洋実習」	4.6	0.8
Ⅴ 授業全般に関する項目	Mean	S.D.
(タ)この授業は楽しかったか。きつかったか。	3.2	0.7
【 5大満足 4満足 3どちらでもない 2不満足 1大変不満 】		
(チ)この授業に対して、努力して取り組みましたか。	4.3	0.7
【 5大変満足 4満足 3どちらでもない 2不満足 1大変不満 】		
(ツ)この授業に対する総合的な満足度はどうですか。	4.5	0.6
【 5大満足 4満足 3どちらでもない 2不満 1大変不満 】		

Ⅰ 水中運動への親しみに関する項目については、(ア)4.1(イ)4.4と各項目で高い結果を得た。本授業を通じて「水中での運動に自信が持てるようになり、泳ぎが好きになった。」ということが出来る。
 Ⅱ マリンスポーツに関する項目については、(ウ)～(オ)の項目において4.5～4.6と非常に高い結果となった。本授業を通じて「スノーケリングにとても親しみを持てるようになり、スキューバダイビングやスクーバダイビングへステップアップしたいと強く思うようになり、マリンスポーツに高い関心を持てるようになった。」とまとめることができる。マリンスポーツに関する基本的な知識、技術に関してははやや自信を持つことができた。
 Ⅲ 安全行動に関する項目に関しては、(キ)～(ケ)の項目において4.0～4.1と各項目で高い結果を得た。また、(コ)～(サ)の各項目において、4.5～4.7の非常に高い項目を得た。本授業を通じて「マリンスポーツにおける安全行動について特に意識が向上し、バディ行動や集団行動に対して特に自信が持てるようになった。また溺水事故、海洋危険生物からの被害に対する予防や対策について自信が持てるようになり、スノーケリングにおける自己保全能力について自信が持てるようになった。」とまとめることができる。
 Ⅳ 授業内容に関する項目については、(シ)～(ソ)の座学、(セ)プール実習、(ソ)海洋実習において何れも4.5～4.6と非常に高い結果を得た。本授業内容について、「受講生は、講義、プール実習、海洋実習という授業内容全てに極めて満足している。」ということが出来る。
 Ⅴ 授業全般に関する項目については、(タ)3.2(チ)4.3(ツ)4.5の結果を得た。本授業について「特別にきつかったり楽しかったりすることなく、受講生は熱心に努力して授業に取り組み、総合的には非常に満足している。」ということが出来る。

まとめ

本授業は、水中運動がとても得意な者からとても得意な者まで幅広い能力の学生が受講していた。また、多くの学生がダイビングやスノーケリング未経験者(82%)であった。講義2回、プール実習1回、海洋実習2回分の授業を通じて、受講生は水中運動への自信を獲得し、泳ぎが好きになった。また、スノーケリングにとても親しみを持てるようになり、ステップアップやマリンスポーツ全般へ高い関心を持つようになった。
 安全行動については特に意識が向上し、バディ行動や集団行動能力、溺水事故や海洋危険生物からの被害に関する予防や対策についての自信獲得を通じて、スノーケリングにおける自己保全能力について自信が持てるようになった。
 受講生は、熱心に努力して授業に取り組みしており、講義、プール実習、海洋実習と全ての授業内容に関して満足度が極めて高く、本授業に対して総合的に非常に満足している。

資料 1. 日本野外教育学会第 17 回学会大会における遠矢先生の発表資料

2. くいなエコ・スポレク公園周辺視察 (スポーツキャンプ地調査)

名桜大学の視察および先生方との情報交換終了後、さらに北へ40分ほど車を走らせた沖縄本島最北端にある国頭村へ向かい、くいなエコ・スポレク公園及びその周辺の視察を行った。そこには、くになみ球場、くになみ屋内運動場、国頭陸上競技場、シーサイドテニスコート、総合体育館、クロスカントリーコースなどの施設が整備されている。

プロ野球の秋季キャンプを皮切りに、冬期シーズンは何かしらのスポーツ競技のキャンプの予定が切れ目なく組まれていた。それらのキャンプに対しては村をあげて歓迎し、万全の受け入れ体制が整えられているようで、周辺の公道にも“陸上長距離チームの合宿中。走行注意”なる看板が、交差点のあちらこちらに置かれていた。

視察の日は、くになみ球場で日本ハムファイターズの2軍が韓国プロ野球チームとの練習試合を行っていたが、おそらく200名近いファンが観戦に訪れていたと思われる。そして、駐車場に駐車された車の多くがレンタカーであったことに驚いた。2軍といえども、プロ野球チームのキャンプをもたらす経済効果は、その地元にとっては非常に大きな影響を及ぼすのであろう。

名護市から国頭村までの道中には、あまり信号を見かけなかった。適度なアップダウンや、海沿いからちょっと内陸へ入れば程よい坂道もみられ、自転車やトライアスロンでもいいキャンプ地になると思っていた。案の定、途中で自転車チームの練習に遭遇した。空港からのアクセスは考慮しないで考えると、トライアスロンの練習をするには非常に恵まれた環境である。公共の50mプールがあれば申し分ないところであったが、近くの学校のプールなども借りることも検

討できるかもしれない。

確かに空港からのアクセスはいいとは言えないが、多くのチームがキャンプ地として選択するに値する環境であった。ここで選手を指導している自身のイメージが浮かび、少しばかり楽しい気持ちが湧いてきた。



写真7. 国頭陸上競技場入り口



写真8. 国頭陸上競技場内



写真9. 陸上競技場および野球場周辺走道



写真10. 国頭村スポーツキャンプ予定(陸上競技場前掲示板)